

牧師室から (2021.7.4)

この間、海老名駅西口の本屋に行ったらBGMで気になるピアノ曲が流れていた。ショパンのノクターン作品32の2変イ長調である。彼のノクターンといえば作品9や15のシリーズ或いは遺作嬰ハ短調が巷ではよく聞かれる（私は27の2が結構好きなのだ）。海老名は良いところだと思った。ただその後が続いた曲はリストの愛の夢第3番のオーケストラ編であったので、少し気落ちした。ショパンの曲はそのフレーズを少し聞いただけでそれと分かるし、ピアノ以外に編曲するとその詩情味は薄れてしまう独自性がある。またリストとショパンはロマン派として括られることがあるが、実は真逆のタイプであると思う。リストはロマン派の特徴であるように、文学や美術などからインスピレーションを受けたということで標題を付けているものが多いが、ショパンは違う。また音楽自体もリストは外向的、技巧的だが、ショパンは内向的、運指も自然な感じがする。生き方においても、リストは後になって修道院に行って華やかな舞台から身を引いて、修道生活を送るが、どうもそれに耐えられなかったらしく、還俗するのである。確かにリストは宗教曲を書いているがショパンは書いていない。私はベルリンの語学学校でポーランド出身の夫人と知り合ったが、彼女は直ぐに「今夏一家でワルシャワに帰省するけど一緒に行かない」と、どこの馬の骨かわからない東洋人を誘ってくれた。ベルリンからワルシャワへ行く道の途中にショパンの生家があり、そこを訪ねることができたのは願ってもない夢の様なことであった。辺り一面が麦畑で、庭には小川が流れていた。当時の超インフレの時代、ポーランドの紙幣にはショパンの肖像があった（因みに当時のドイツの高額な青い100マルク紙幣には端正なクララ・シューマンの顔があり気持ちの良いものであった。日本でも大分遅れて樋口一葉の5千円札が出たが・・・）。彼の墓はパリにあると言うが、心臓は遺言通りに、故郷のワルシャワの中央広場に面した聖十字架教会に安置されている。

(鈴木淳一牧師)